

がさなくてはいけない。そういう努力をインフラに関わる人たちは意識してやらなければいけないという感じがしました。

**【小出】** 全く同感で、私も新聞記者の仕事をしていました、物事の本質というのは、その始まりに隠されているのです。どんなポリシーでも戦争だって、誰か言い出しっぺがいるわけです。言い出しっぺさえわかれば、本当の狙いがわかる。だからやはり、そもそもの始まりに遡って、日本国の湿地で成り立っているとか、新潟というのは改めて感じたのですけれども、新潟はそのまま正直に、新しい沼地だぞという地名ですよ。だから立派だなと思うのですが。そもそもの始まりから物事を考えるというのは非常に重要で、その情報がなかなか伝わっていないというのは全くおっしゃるとおりだと思います。それから、畑村さんが言われた線から面への情報、それぞれの風力計を持っているという、新聞も情報産業ですから、情報という言葉自体を明治時代に翻訳したのですが、英語のインフォメーションを情報と訳したのですけれども、本当の情報というのはインテリジェンスで、例えばCIAというアメリカ中央情報部あれはセントラル、インテリジェンス、エージェンシーです。イギリス軍事情報部第5課とか、MIファイブとこれはミニタリインテリジェンスですよ、本物の情報というのはインテリジェンスでインフォメーションというのは日本語では僕は資料というのが一番近いのではないかと。それぞれの役所が風力計を持っているそのデータというのは、これは資料だと思うのですよ。それが社会事象に対して、インパクトを与えたり、大変重要な参考になったり、それを与える事によって、突如目が開かれたり、その瞬間にインフォメーションがインテリジェンスになるという。だから、情報の氾濫というのは言葉の間違いで、氾濫している状態は資料ですよ。それは整然と線から面へと問題解決ができる途端に、その風力計のデータはインテリジェンスと情報になると思うのです。

これは翻訳間違いだと僕は思いますけれども、それで非常に混乱しています。情報が氾濫しているとか、氾濫しているのは資料だけと。情報というのはその氾濫から整理された状態で始めて情報というのです。だからそういうのが様々な現場で

混乱をきたし、結果的に資料だらけで大型コンピューターでもそれは、コンピューターで分析できるだけではそれは資料だと思うのです。それがいろいろ適用されて情報になると思うのだけれど。

今日のテーマは国土形成なのですが、とても国土は形成できなかったですけれども、いろいろな話、私自身もすごく触発されました。とても結論が出るようなテーマではありませんが、先生方の言われた素晴らしい言葉の断片でも皆様の記憶に残れば、それで十分に役割は果たしたのではないかというふうに思っております。どうも長時間、大変ありがとうございました。